草の芽句会だより

NO,167
22 7,7

クレーンの石垣修理蝉の声　貞子
飛行雲先は点なり夏青し

一人住む気ままはよし梅雨明けぬ　節子
父の忌に集ふ七人夏座敷

万緑にかこまれて座す今朝の城　純子
のど飴をふふみて涼風受けて座す

木も犬も吾も猛暑の中にいる　範子
よく見れば萩の一輪風にあり

城濠の二基の噴水上がりをり　禮子
庭石に影して揚げ羽消え失せり

植田風厨の窓に届きたる　剋子
夾竹桃濠に映して紅き影

噴水や上の青空押し上げて　文子
夕されば ねぶの花咲くお濠ばた

暮れそむる夏雲やさし風少し　芳子
夕晴れの空に鳥飛ぶ蝶の飛ぶ

出席者　川原　氏家　森　吉崎　馬場　小山
投句者　大黒　小林

連日の猛暑である。遠い山並みには入道雲が幾重にも湧き上がり、その激しさに圧倒される。見返り坂は緑の陰に覆われ薄暗い。涼しいかも？　そう思いつつも朝からの暑さに疲れ果てて、上る元気がない。うるし林のベンチで仲間と冷たいお茶を飲んで、やっと生き返った気になる。濠からの風が思いの外涼しくて思わず深呼吸、やっと句が浮かびそうな気分になってくる暑さ寒さにめげず、もう何十年来いつものメンバーが揃うのである。月に一度の城山歩きは、私達に人生のエネルギーを与えてくれているような気がする。

部屋に戻ると冷たいコーヒーとお菓子が待っていた。いつもながらお世話係さんに感謝である。お菓子を食べると、下五に悩んでいた句が完成するのである。「次回は八月、まだ暑いけど一回休みにするのがええ？」呼びかけに誰からも返事がない。八月も句会は決行？である。